



毎月一回十五日發行（定價一部五錢一年郵稅共五十錢）

編輯人 須田 主 野上 縣 市 田 須  
 發行所 野上 縣 市 田 須  
 印刷所 野上 縣 市 田 須  
 社 會 式 株 限 新 日 每 邊 信 所 刷 印

### 福島、茨城兩縣下の共進會を觀る

蒲生 光 外

福島縣蠶業試驗場は大正三年二月の創立にかゝり正に二十周年を迎ふることになつたので、去る十一月三日から三日間、其の祝賀を兼ね、養蠶業經營更生共進會が催された。針塚先生に代て祝賀の爲め出張の命令を受けた予は三日午前五時上田を出て午前十時幸らうして大宮にて仙臺行進急に飛乗つた。比較的好都合な汽車だから、非常な混雑で僅かに一席に安堵したのみであつたが、間もなく宇都宮驛に達する頃、同室に東京高蠶の本多校長及京都高蠶の村松校長の居らるゝ事を發見し、兩先生とも、同一目的のために梁川に向はるゝことを承はり、幸に同列の光榮に浴して午後二時三十分、流石は兩校長の御着のことにて三直轄學校の同窓から成れる福島縣下の蠶官及實業家の多勢に迎へられて無事福島驛に着いた。

十周年式を舉行さる。場長の式辭ありて福島縣内務部長の告辭、本多東蠶校長、村松京蠶校長の祝辭ありて予も亦針塚校長の代理者として濟越乍ら祝辭を申述べた。續いて、竹内國立蠶業試驗場福島出張所長、富田勘之丞氏他多數の來賓の祝辭ありて盛會裡に二十周年祝賀式を終り、共進會の陳列を參觀した。

本共進會は伊達郡養蠶組合の主催として、福島縣下一圓の各養蠶實行組合單位に出品せしめた各品種の蠶繭と、養蠶業經營の成績とを審査せられたものであつて、今其の成績の概要を摘録すると次の通りである。

一、出品點數

蠶繭（春繭）	六九一點	合計	一、七六〇
蠶繭（夏秋繭）	九五九點		一、〇〇〇
經營成績	一一〇點		一一〇

品 種 名	出品點數	生絲量	對一時間繭絲量	繭絲長	繭絲織度	類節
歐十八×支二〇	一八〇	一、三〇	八四、四	八三〇	三、一七	九七、四
歐十七×支十四	一八三	一、二五	七八〇	八三三	三、一〇	九六、二
歐十六×支十四	一八〇	一、二五	六八〇	八三〇	三、一〇	九六、二
那是白×那是金	三	一、三〇	八三〇	八三〇	三、一〇	九六、二
豐白×瑞祥	三	一、三〇	八三〇	八三〇	三、一〇	九六、二
豐黃×瑞祥	三	一、三〇	八三〇	八三〇	三、一〇	九六、二
口 七×支二〇	二八八	一、三〇	七三、七	七三〇	三、一〇	九四、五

二、品種別擬賞點數

擬賞點數中主なるものを記せば次の通りである。

（春 蠶 繭）	等一	二三	等四	計
× 國蠶十八號	三	一〇	四	〇
× 同支一〇六號	三	一〇	四	〇
× 同支十七號	一	一	四	〇
× 同支十四號	一	一	四	〇
× 同支十六號	〇	三	四	〇
× 同支十四號	〇	三	四	〇
× 那是金（S）	〇	〇	五	三
× 豐白×瑞祥	〇	〇	五	三
× 豐黃×瑞祥	〇	〇	五	三
× 國蠶日七號	三	七	一	五
× 同一〇六號	三	七	一	五
× 榮光×滿月	一	一	三	〇
× 國蠶日二〇	〇	二	八	四
× 同支二〇六號	〇	二	八	四

山本三六郎著  
 化學純絹絲の工業的完成  
 工業的完成  
 繭絲科學研究會編  
 伊太利蠶絲絹業の衰退原因と其の現況  
 菅原二治著  
 繭絲業法規要論  
 改正  
 市田上縣野長 所行發  
 會究研學科絲蠶 所行發  
 （振替長野6413番）

三、品種別成績

（イ）反當收購額、平均一三貫七二六  
 匁（一一〇組合平均）  
 （ロ）上繭一貫匁當現金支出額、平均一圓三九錢（同上）  
 （ハ）桑園反當自給肥料施用高、平均三九三貫、價額七圓七六錢  
 次に午前十一時から蠶業取締所梁川支所に於て共進會褒賞授與式があり前二校長、福島縣知事、内務部長、山添農林事務官、野崎蠶種聯合會主

事、横尾製絲聯合會主事、竹内福島出張所長、小林青森縣蠶業試驗場長其他多數の參列ありて非常の盛會であつた。尙第三會場たる梁川蠶業講習所内には縣下獨特の蠶絲業に關する國寶とも稱すべき各種の珍品が陳列されてあつた。

同日午後三時過、高須場長に別れを告げ、六名技師の見送を受けて桑折驛から上り列車に乗りて午後八時半宇都宮驛下車、久々に菅澤、糟

現代乾繭機界ノ王座  
 大和式自動輸送乾繭機

1933年代表型

製作發賣元  
 株式會社  
 大和三光商會  
 東京京橋區京橋三丁目二番地  
 電話京橋(50)五三二〇番

營業課目  
 特許大和式自動輸送乾燥機  
 特許川三光式乾燥機  
 特許願やま電ホイロ機  
 特許大和式熱湯自動還元機  
 特許水野式改良ロール  
 特許アイエム・コルセンター  
 特許アイエム・ストーカー

谷兩兄の出迎を受けて懇談の機会を得た。

翌朝五日午前八時宇都宮を出發して小山驛乗替、友部經由にて土浦驛下車、佐藤義助兄及城下政夫氏(東蠶出身)等の御出迎を受けて全蠶蠶具共進會を參觀す。流石に全國から集つた、蠶種製造用具、上簇用具、消毒用具、繰絲用具、其他有益なる蠶具の陳列を拜見し、更に藤本蠶業會社土浦出張所を參觀して歸校の途に着いた。

今回の蠶繭及蠶具の共進會を參觀して特に感を深うした事は第一に近年に於ける優良蠶品種の普及發達であり、就中國蠶系品種は何と云つても名實共に其の首位を占めたのは當

理事長交替の辭

私儀昭和四年度より蒲生氏病氣静養中の後を承けて理事長の要職を穢し本年を以て滿四ヶ年を経過致しました。其の間身不省にして經驗にも乏しく、兎角萬事滯滞勝ちでありました幸に大過無く過すことを得ましたのは偏へに會員各位の厚き御同情の資と感謝措く能はざる所であります。今や蒲生氏も全く舊に倍する健康體に復歸致されましたし、又理事長の任務から云ふても校内に在つた方が統一連絡上はるかに効果的でありますので今回の改選によつて同氏を理事長に得たることはまことに御同慶に堪へない次第であります。

茲に謹しみて在職中の御好意を謝し尙本會のため將來とも御聲援賜らんことを冀ひ御挨拶申上度如斯であります。

十一月二十二日

前理事長 松村季美

私儀今期理事會の選舉により復た再び理事長の要位を占むることとなりましたもとより淺學非才にして其の器では無いのであります。内には各理事の格別なる御助力があり、外には會員大衆の熱誠ある御支持があり、特に前松村理事長の切なる御推輓もあつたので敢へて掃らす其の職責を穢した次第であります。

此の任期中には二十五週年祝賀事業等重要なる事項が山積して居りました其の責の重且つ大なることを恐るゝものであります。微力乍ら赤誠以て事にあたり各位の御期待に添ふやう奮勵努力致す覚悟であります。から何卒従前通り切に御援助賜らんことを御願ひ致し茲に就任の御挨拶を申上ぐ次第であります。

十一月二十四日

理事長 蒲生俊興

然の結果と云ふ可きだ。次に伊達地方は古來の蠶絲國だとは云ひ、かく

も中央の各大家を來賓に迎へての堂々たる今回の催しには流石に高須兄の腕前の程も見えて嬉しかつた。又蠶具に關しては從來跋扈した劉桑機などが全く姿を消して製簇器(改良簇)毛羽取器等が非常に多く見られたのも時代の潮流と云ふ可きであらう。因に蠶具共進會で名譽賞牌(縣特別賞)及金牌を受領した蠶具の名稱を示すと次の通りだ。

滿洲纖維業概見

(一)

野口新太郎

次の拙文は私が今夏の旅行で見た滿洲纖維業の概観であります。此の旅行は約一ヶ月と云ふ短期に殆んど全滿を廻廻り尙且その間に沿道各地に活動する皇軍を慰問する等忙に忙しい日程だったので、殆んど落付いた調査等出来ず主として僅かに餘暇を拾つて滿鐵や關東軍特務部等の方から話をきいたり資料を貰ふたりしたに過ぎなかつたのであります。従つて其の内容に到りましては眞に皮相淺薄、到底御照會に足るものでは有ませんが、或は多少の御参考にもと思ひまして厚紙敷も貴重紙面を穢した次第であります。

羊毛

近時日滿經濟ブロックと言ふ言葉が頻りに唱へられますが、滿洲の産業で、此の日滿ブロック結成上最も重要な役割を演じるだらうものは、まづ羊毛だらうと思ひます。

滿洲は天興の畜産國であります。適當の方法さへ講ずれば世界的畜産國たる事が出来ると思ひます。興安省一帶の降雨量乏しいため農耕地として適しない草原など畜産に利用されるべき絶好の地域だらうと思ふのであります。

名譽賞牌 豊島式繭鑑定台付乾繭處理装置、土浦町豊島庄十郎  
金牌 日の本式製簇機、神奈川縣平塚市、日本農蠶機製作所  
同 池下式まぶしかため、東京市麹町區丸ノ内一ノ八、文化農報社  
同 日の丸繭毛羽取機、東京市下谷區坂本町一ノ四、笠井忠治(一九三三、一一、八誌)

又國民は愛畜心に富み、その飼育馴使に天稟を持つてゐます。殊に蒙古人の如きは元來遊牧の民で、家畜は一つの生活資料でありまして、廣漠な大草原を天興の牧場として今猶水草を追つて移動し歩いてゐるのであります。

現在滿洲に於て飼養されてゐる綿羊は其の數約四百萬頭と推定されます。處が今迄滿洲の綿羊は毛を刈る目的でなく、主として皮を利用し肉を食用に供するために飼養されてゐたのですから、其の毛質は粗毫で紡毛に適せず、又産毛量も眞に僅少で一年一頭三度内外に過ぎないのであります。

滿鐵農事試驗場ではこれを深く遺憾として多年苦心改良試驗の結果メリノ一種を改良原種として使用する時は、毛質はメリノ一種の如く柔軟となり且産毛量に於ても約三倍に増加し、尙肉量肉質に於ても在來種に劣らぬものが得られる事を知つたのであります。處が日本の羊毛需要状態は如何か

と申しますに、近年漸増の傾向でありましてその量年約二億封度によるのであります。之を全部滿洲で得んとするには綿羊約二千五百萬頭を必要とし、現在の四百萬頭を全部優良種に改良し、而も七倍の頭數を得るまでに進まなければならぬのであります。

斯る事が果して可能か如何かは要するに今後の研究と實行に俟つの外はないのであります。然し改良の普及されると共に漸次補給の途を辿り得る事は異論ない所でありまして我毛織業百年の大計として是非達成すべき事業であります。

棉花

滿洲の羊毛に次いで將來を期待されるものに棉花があります。滿洲の奉天以南は氣候土質棉花の栽培に適し、現に遼陽、海城、義錦等の各縣には相當廣く栽培されてその作付面積約八万町歩年産額一萬五千噸に達すると推定されるのであります。然し今迄栽培されたものは大部分品質不良で殆んど全部地方民の蒲團等に消費され、紡績用に供せられるものは僅かに三四十噸に過ぎなかつたのであります。關東廳及滿鐵農事試驗場では夙に此の改良に留意し、多年苦心の結果米棉との交配によつて、優良な改良種を工夫し得たので、之を獎勵種として愈々積極的に滿洲棉改良及獎勵に呼びかけてゐるのであります。

即ち此の改良種ならば棉質は大いに改善されてこれだけでも三十番手紡出に差支なく優に印棉に代用し得られ尙操棉歩合も米棉に匹敵し而も滿洲の土質氣候に適合してその收穫

量も在來の四五割増しと言ふのであります。

處で我國が必要とする棉花は其量約六七十万疋に上るのであります。尙年々増加の有様であります。されば之を滿洲で補給するの時期を想像する事は可成り遠い將來の問題であります。然し指導宜敷きを得るなら強ち不可能とも申されませぬ。

一般滿洲主要作物の反當り收穫量平均大豆十五圓、小麦、玉蜀黍十圓内外に較べて此の改良棉花では優に二十圓確實と言ふからには、今後栽培の普及擴大は期して俟つべきものがあります。よし自給自足の時期は遠い彼方の事であらうとも、やがては次第に輸入を補ひゆくのでありますからその前途には多大の期待が懸けられるのであります。

○柞蠶

滿洲柞蠶の起源は今から百年程前でありまして、その著しい發達は極近年の事でありまして現在では滿洲の重要物産の一つになつてゐるのであります。その産地は遼平、岫巖、安東、寬甸、西豊等の各縣を中心とし南は關東州、北は吉林省の山間に至るまで廣く普及されて居りまして、その産額凡そ百億粒、金額にして二千五百万圓と推定されてゐます。又生産された柞蠶繭は其の八十パーセントまでは滿洲で加工され所謂滿洲柞蠶糸となるのであります。その量千五百貫價額凡そ三千萬圓に達するのであります。

此の柞蠶繭工場を滿洲では絲廠と呼びます。絲廠は柞蠶産地に到る處に散在してゐますが安東縣が最も盛大

であります。

日本の絹織機業は此の滿洲柞蠶繭の供給を受けて之を製織し、日本絹の名に上り全世界に輸出してゐるのであります。その價額二千萬圓に達し日本の重要輸出品となつてゐるのであります。而して滿洲柞蠶繭の重要輸出先は申すまでもなく日本でありまして、又日本としても他に

開港拾遺集 (五)

◇日光の變の事

嘉永七庚寅二月十四日曉六時前日光神宮において奇異事有りとして次の如き變事が出て居ます。

右者明け六時前頃新宮拜殿へ宮仕香爐を備に參候處 本社にて震動致候間様子相伺候處御本社鏡前のおのづと左右に開き中より白鳥一羽飛出候と見請、平臥なし夫より早速安養院へ申達、御内陣へ相伺候處何共相替儀無之候間元之如く扉締め候由。

右は異國船一條に付き神使上京にても致候哉と鳥々御沙汰仕候、日光において右様の奇異是迄無之餘り奇談に付此段申上候。右は日光吟味役野澤少輔氏が堀田美濃守の御用人宛に差出した届書ですが、幕府に取つて嘉永外交の危機來るの折柄相當に神經を失がらした事と思はれます。尤も當時の幕府心理の反射鏡であるとも云はれて居ります。

◇江川氏決死隊を率ひるの事

二月十日のペリリ對林大學の一騎

之を求め所がありませんので、産業上極めて重要な經濟關係を構成して滿洲柞蠶業の盛衰は勢ひ我絹織機業に重大な影響を及ぼし、同時に又日本機業の消長は直ちに滿洲柞蠶業の命脈を制するに至つてゐるのであります。日本機業の需要からみた滿洲柞蠶の地位は眞に重要と言はねばなりません(未定)。

横濱 正木章三

打の第二次回見が二月十九日横濱に於て行はれた。

連日緊張裡に奔走しつゝあつた幕府側の外交主腦部の人々は可成り興奮状態にあつたやうです。

この日も大學頭始め役々が、江戸から天神丸と云ふ御座船にて神奈川へ乗り込んで來たのですが、應接所の警衛を志願した憂國の志士約六十名が江川太郎左衛門氏に率ひられて詰めかけたとの事です。

所が林大學頭は流石に大きく、一徹の江川氏を説き伏せて決死隊に解散を命じたのでした。即ちその理由としては。

應接所警衛の儀は兼ねて小笠原左京大夫、眞田信濃守人數も御座候へば、不足は無之尤も應接對談の儀は可成穩便に取計候(中略)又變事とも相成候は異人共直に江戸海へ乗込み戦争と相成り候は必然の事故、決死の士は一人たり共多く江戸へ指置き、御膝元にて忠勇し戦功も建候。と云つた譯で、君公の馬前にて討死せよとすゝめ實に悲壯なものがあつたのを感じます。

◇十九日會見の事

斯様に江川氏等の身命を賭して心配したにも拘らずこの日の應接對談は頗る無事なものであつた様です。次ぎに林氏の圓滑なる辭令を書き直して見ませう。

ペリリ「船中缺乏の品も下されば有難い。然し何れの國へ參つても他國の品を唯賣ふ譯には行きませんから、是非代料は差上げたい」

林「船を救ふ爲めに遣した品物であるから決して代料はいりませぬ」

ペリリ「代料がいけなければ、是非返禮が致したいのであります。是非何ですか」

林「返禮と仰言るなら仕方がありません」

ペリリ「では、返禮の品は我國の物産にて差上げませうか、それとも金銀にて差上げませうか」

林「返禮ならば、どちらでも良いのですが、品物ですと取扱いに不便ですから」

紅藍洞染織 漫筆 (二)

相生 星田 馨

我國に於ける絹の變遷

垂仁天皇の御代 垂仁天皇の使蘇那曷叱知に赤絹一百疋を賜ふ。

垂仁天皇の御代になると、絹織の業が稍開けて絹も製造すること以前より多くなつた様である。即ち日本書記卷六垂仁紀二年の條に「前略住邦の人蘇那曷叱知請さく國にかへりなむ。蓋し先皇の世に來朝して未だ還らざるか」故に致く蘇那曷叱知を賞し給ふ。仍りて赤絹一百疋をもたらして住邦主賜ふ。然るに新羅人道に遮へて奪いつ。其の二國の怨是の時に始めて起れり」云々とあり。是をもつて見るに絹織の業も以前より多くなり、又進歩せしめものならんか。

神功皇后の御代 神功皇后始めて千縹高織を神祇に供せらる。是絹を神祇に奉る始である。即ち日本書紀卷九神功紀首條仲夷天皇九年三月の條に「三月壬申朔皇后吉日を選びて齋宮に入り親ら神主となり給ふ。即ち武内宿禰に命じて撫琴かしめ、中臣鳥賊津使主を喚びて審神者と爲す。因りて千縹高織を以て琴頭尾に置きて諸さまをして曰く」云云

神功皇后三韓を征伐せられた結果新羅絹織を賞す。これより本邦人は韓の絹織の特に

佳なることを知つたのである。

日本書紀に曰く

「即ち皇后の杖ける牙をもつて新羅王の門に樹て後葉の印と爲す。故に其の矛今猶新羅王の門に立てり。爰に新羅波沙麻錦、即ち微叱已知波沙千岐を以て質と爲て、仍て金銀彩色及び綾羅絹綃を贈し、八十艘船に載せられて官軍に従はしむ。是を以て新羅王常に八十船の調を以て日本國に貢る、其れ是の縁なり」とある。

應仁天皇の御代

仲哀天皇九年より八十三年を経たる應仁天皇十四年に至り、支那人融通王百二十七縣の奏民を卒ひて歸化し絹帛及寶物數種を獻じた。天皇之を嘉みし大和の朝津間の腋上の地を賜いて之に居らしめたのである。こゝで融通王は支那様の絹帛の要法を始めて我邦に傳へたのである。

一書に曰く

應仁天皇の十四年に奏の始皇帝の三世孝武王（日本書紀には弓月君と言ふ）百濟より歸化し、絹布及び寶物數種を獻じ奏して曰はく「臣已國の人夫百二十縣の民を領めて歸化せんこそ。新羅人皆之を拒むに因り皆加羅國に留まれり。」と是に於て天皇武内宿禰の子葛城襲津彦を遣り弓月の民を召さしめ給ふ然るに三年を経る迄襲津彦復命せず因りて十六年八月に至り平群木菟宿禰と的戸宿禰とに精兵を授けて加羅に遣はし

襲津彦の久しく歸らざるは必ず新羅人の抑留するに由るならん。汝等往きて新羅を擧てと命じ給へり。二人新羅の境に位む。新羅王大いに懼

れて罪に服す、仍ち弓月の人夫を將ゐて歸る。而して襲津彦も亦歸れり。天皇融通王をして大和の朝津間の腋上の地に居らしめ多くの支那風の工藝を傳へてお給ひぬ」とある。即ち支那様の絹帛の製法を始めて本朝に傳へし者はこの融通王である。

應仁天皇の十六年には百濟の照古王絹帛を織る工人を獻じた。その名を西素と言ふ、時の人西素を稱して久禮波止里と呼んでゐた。久禮波止里と言ふのは當時の俗言で外邦の織工に與へた言葉である。韓土から始めて裁縫の術を傳へたのは應仁天皇の十四年二月である。百濟王緯衣工女眞毛津といふものを貢した。其の後を來目の緯衣と言ふ。

日本書紀に

「應仁天皇の十四年春二月百濟王緯衣工女を貢る、眞毛津と曰ふ。是今の來目衣縫が始祖なり」とある。「阿知使主及び都加使主を吳に遣して縫衣工女を求めらる、吳王は工女兄媛弟媛吳織穴織の四歸女を與ふ。」應仁天皇の三十七年阿知使主及び都加使主を吳に遣して縫衣工女を求めしめらる。使主の稱は蓋し此の時に賜ひしものゝ様である。これは専ら外國の使の事を掌る職名である。當時支那は晋朝の亂世であつて晋帝は僅に楊子江以南の地を保つてゐた、我が國ではその地方を吳と稱してゐたのである。二人の使主は高麗に依つて吳に到る導者を求めた。高麗者は久禮波久禮志の二人を以て導者と

した。これに依つて二人は吳に往くことが出来て吳王は工女兄媛弟媛吳織穴織の四歸女を與へた。是の月に（四十一年春二月）阿知

使主等吳より筑紫にかへる。時に胸形大神工女等を乞ひたまふことあり。故に見媛をもつて胸形大神に奉る。是れ即ち今筑紫國にある御使君なり。既にして其の三人の婦女を率ゐて津國に至り武庫に及ぶ天皇崩りまして及ばず、即ち大馬船等に載る。是の女人等の後は今吳衣縫、蚊屋衣縫是れなり。（日本書紀卷第十）かくて二人の使主は應仁天皇の四十年二月にあつて吳から筑紫に歸着したのである。時に胸形大神（筑前の國宗像郡宗像神社）工女を乞はれたので見媛を大神に奉つたのである。

### 代議員會に列して

篤之

一、前書き  
さきに官界の或る場面に嫌悪を感じ、これを離脱し、今はさらに新方面の開拓を志して東奔西走、實に死線をさまよう努力をして居る、その小閑を偷んで代議員會へ列したのである。

姊捨驛でフト目を覺まして一望荒涼たる、景觀に面したとき、蘇生したやうな快い氣分に浸たされた、鏡台山は右へ右へと隠れて行つてやがて犀川の白いむくろが表はれて來た。  
篠ノ井で多くの時間を徒消することを避けて長野驛まで延長した。長野市の善光寺通りの補裝道路を突つ走つて、恰も降り濺いだ、時雨に映ゆる淡い虹の下に、善光寺平や、戸隠山の美を望めた、得たものは塵界を放れた大自然に抱擁されたと言ふ氣分に満たされた、長野へ來てい

る。而して使主は三婦を率ゐて津國の武庫に至つた。ところが此の時天皇は既に崩し給ひし後であつたので大馬船等即ち仁德天皇に獻じたのである。  
其の子孫は吳衣縫蚊屋衣縫氏等である。これを見ても當時大和朝廷が工藝の輸入に如何に熱心であらせられたかを知ることが出来る。吳藍（紅、吳服などといふ文字も皆こゝに根ざしてゐるのである。  
兎に角奏民の歸化して以來絹帛の産出は大いに増加し縫織の技も亦一段と進歩したのである。（つゞく）

二、印象  
こんどの代議員會は大きな問題があつたせい、何時もと異つて頗る廣い方面から代議員が出席されて、各支部々々の色彩を強調せられたところ、新しみがあつた、會する者三十三名、十八支部に亘つて居つた。代議員旅費支給の件（北九州）が頗る公平な感情の下に可決されたことは美しい風景であつた。會議は相當もつて委員附託にまでなつたが論議の中心は来る二十五周年祝賀式を、如何に有意義に擧すべきか、登象徴せしむ可きかであつたらしい、意見は反しても歸するところは一なのだ。

三、希望  
提出された問題は迂餘曲折があつたにも係らず、略本會案を骨子としてこれに僅かの修正を施して目出度可決決定せられた、こゝに殘された問題は壽像建設問題と同窓生に贈呈する紀念品問題である。

闘士として目立つたのは篠田（三重）八木（東京、橋本（群馬）立岩（兵庫）島倉（岡山）木内（神奈川）の諸君で佐藤（北陸）の議長振り岸（東海）の進行係振り、何れも出色のものであつたことを披露する。  
晝食は名譽會長たる針塚校長閣下の御招待で、數十人の會員が均しく朱塗りの辯當箱を圍んで談笑したことを嬉れしいことの一つとして特記したい。  
晚餐は例の通り觀水樓で行なはれたが、本年は在校諸先生の御臨席を得て誠に暮はしい、美はしい盛宴であつた。この日は何時もの自己紹介がなかつたので飯島氏の探點を得なかつたことを残念とする、閉會は八時ごろ、自分は八時五十分の下りで西下したがこの汽車に乗つた人は無かつた、それ／＼のグループの集りがあつたこと、想像する。

四、壽像の問題  
この問題は相當論議されたものであつたが、要は千曲會館又は同窓會事務所と關聯したものであつた、決定は金堂萬參千円で壽像建設を爲すことだつたが、それは立像であるか坐像であるか、將た又た胸像であるか、或は銅突版であるかは決定して居らない、此は何れ壽像建設委員によつて考究せられることであらうが周圍、形質に促はれることなく眞に

千數百名の同窓生の總意を表徴する  
息の籠つたものにして欲しいと衷心  
から希望する次第である。

〇、紀念マークの問題

同窓生に對する紀念品として胸間  
を飾るマークを制定すると言ふ案の  
突如提出され決定して仕舞つた。こ  
れも必ずしもマークで無くてもよか  
らう、或は針塚校長の肖像入りメタ  
ルモ一案ではあるまいか、マークの  
制定の趣旨には成程とうなづかれる  
點はあるが、官廳、會社、工場等各  
異つた勤務場所を持つた同窓生が之  
れを佩用する機會は一年に一回若く  
は二回位なものであらう。そんなも  
のに壹千圓からの金を出す必要は絶  
對にない、私は銀台金メッキの針塚  
校長肖像入りのメタルを紀念品とし  
て作成することを提案する。

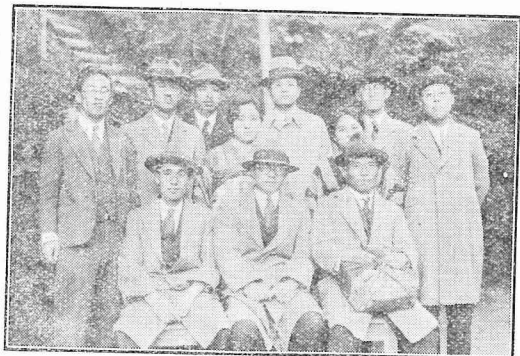
以上二問題は確定されたものでは  
なく、これから相當考究の上決定さ  
れるべき性質のものであるが故に敢  
て各位の御意見を喚起したのであ  
る。(十一月二十四日夜奈良にて)

熊本千曲會便り

何時も熊本市内で千曲會の總會を  
開いて郡部方面よりの來會を煩はし  
て居たのであつたが今度は郡部方面  
の諸兄の希望もあり又お互に打ち解  
けて秋色を探るのも一興であると言  
ふ見地から九州本線高瀬驛(急行で  
通過する場合は殆んど知られない驛  
で熊本と大牟田の中間にあり)のす  
ぐ近くにある立願寺温泉に開催する  
ことにした。

時は十一月十一日。宿は錦温泉紅  
葉館。室と別嬪は父母會長の特別の

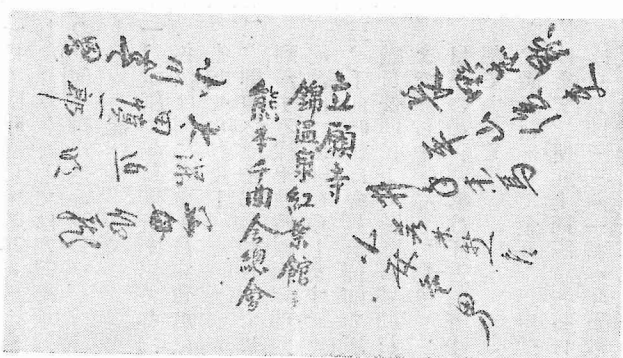
幹旋で一番上等な所が用意されて居  
つたのは嬉しい。肥後製絲の玉名工  
場長の肩書が馬鹿に強く光つたらし  
い。室の前は紅葉館の名にふさはし  
い眞紅な紅葉が今を盛りと秋日に照  
り映えて居る。集まつた面々を順序  
不同に御紹介に及ぶと地元(肥後の  
工場長でもあり熊本千曲會長でもあ  
る父母仙藏氏、色は多少黒いが濃厚  
なる好紳士で一度御目に掛ると永久  
に忘れられない。次は幹事の太田慎  
一郎氏、熊本の國蠶試では無くてな  
らない人物で近頃所長代理を度々勤



前列左より 若林、平山、太田、  
深迫、父母、井手、長野、  
小川、小林 (小林撮影)

め所長學は昔に卒業との事、只今頭  
髮の成長を許して居らないから五つ  
六つは若返つて居て近頃の氣焔は大  
したものだ。非常時の折柄四人の兵  
士を生産養成して居るとは頼もしい  
若林新一郎氏、若林製絲小川工場の  
大將、千曲會の組合には何時も精勤  
この調子で工場を廻られたら工場の  
連中大分苦勞するだらう。兎に角縣

下では郡是、片倉以上に業績を擧げ  
て居るから豪勢なものだ。井手末馬  
氏、今年の十月山奥の矢部の農學校  
より市内の熊本農學校へ大榮轉、之  
からの活躍が見物だ。深迫明氏、縣  
の蠶業試驗場の若手、昭和七年の二  
月、政變の折柄突然取締所から試験  
場へ轉げ込み最初は「蠶の飼ひ方を  
知つて居るだらうか」と疑はれた位



だが今は(以前からかも知れないが)  
配布係の蠶を一手に引き受けて飼育  
する程の腕前の所有者だ。長野忠顯  
氏、言はずとも知れて居る長野貴族  
院議員の御曹子、今は蠶種組の方の  
仕事で多忙の由、濃厚なる好紳士た  
る事は云ふ迄もない。小川春男氏、  
縣廳の一粒種で熊本入りをしてから  
丁度丸一年、熊本の製絲の事なら何  
でも知つて居る、蠶絲課の野球チー  
ムにはなくてはならない選手で先日  
蠶業試驗場との試合には妙技を振  
つたが結局三五對三で惜敗した

と云ふ戦歴を有して居る。平山俊夫  
氏、肥後製絲に籍は置いて居るが今  
は熊本醫科大學生化學教室の加藤博  
士の下で一生涯命命蘭解毒や蠶蛹の利  
用法の研究に没頭して居る。もう一  
二研究の完成せるものがあると聞く  
が今後偉大なる發明を期待して居る  
筆者は小林と稱し縣の蠶業試驗場に  
御厄介になつて居る悪口屋で余り世  
間には知られて居らない男である。  
以上來會者は九名此中特に筆者の  
御願ひして置きたいのは深迫、長野  
小川、平山の四氏には別嬪の嫁御を  
一人でよいから世話して頂きたい事  
である。

全部集合したのは正午、腹の減り  
工合が大きいので會議は後にして懇  
親の宴會が先になつて仕舞つた。筆  
者はこう云ふ會に初めてぶつかつて  
見た。こんなことは内輪同志でなけ  
れば出来ない藝當だと思つた。一杯  
氣嫌で會議が始まり本會からの諮問  
事項に對して、審議し名案百出結局  
長野忠顯氏を代議員に推挙、代議員  
會議に於て熊本千曲會の意志を述べ  
て貰ふ事になつた。

久し振りで秋色を満喫し散會した  
のは午後五時頃であつたか。

後記

代議員に決定した長野氏は病氣の  
爲遂に上田行きが不可能となり早速  
他の人を物色したが時遅く残念なが  
ら代議員欠席の電報を本會宛打電し  
た。

滿蒙行脚記 (二)

野口生

大連、旅順

七月十八日、午前五時起床、もう

船は大連港外にさしかつてゐる。  
東の空から圓い眞紅の太陽、同八時  
大連商業學校生徒其の他の盛んな歡  
迎裡に岸壁に着く。整備した港内設  
備に驚きの眼を見張つてゐる中に上  
陸だ。少時早頭事務所の七層樓の  
屋上に憩ふて市街を鳥瞰し、それか  
らアスハルトを敷きつめた廣い道路  
を宿舎たる關東倉庫に向ふて行進す  
る。宿舎に着いて小憩し希望者は油  
房を見に行く。晝食後は忠靈塔に拜  
參それから滿蒙資源館を見る。

大連の市街は實に綺麗だ、市街は  
アカシヤの街とも呼びたい程街路の  
並木にアカシヤが多く、初夏は雪白  
の花を着けて全市花香漂ふと言ふ。  
そのアカシヤの樹間に點綴する近代  
建築の整々たる風姿、まさに日本の  
海外都市たるのみに差ぢない。

廣いタールマカダムの道路は常に  
清掃夫によつて手入れされてゐるので  
眞に清爽な感じを與へる。大小七個  
の廣場を中心として其處から放射狀  
に流れ出でゐる街路の趣には近代的  
文化都市の清新さを感じる。

夜は三三、五五友と組んで自由に  
市中見物。

七月十九日、午前八時自動車を連  
て大連を發し坦々たるマカダムの大  
道路を馳驅して、戦史の都旅順を訪  
れ、近傍一帶に散在する戦蹟を巡覽  
する。老座山、白玉山表忠塔、博物館  
二百三高地、戦利記念品陳列館、東鷄  
冠山北堡壘、水師營等を一巡し終へ  
た時、我等は頭を垂れて遠く卅年の  
昔を偲び、此の尊き戦死者の英靈に  
對して厚く冥福を禱れば、感謝の念  
ひし／＼と胸に迫り來て熱涙思はず  
禁ずる事が出来なかつた。腥氣徐ろ  
に去つて茲に二十有九年、東洋の平

和は實に日露戦争の賜である。今眼前に見る我等が骨肉近親の碧血と死屍に散はれたる此の山河、永遠に我等の靈場であらねばならぬ。

斯くて紅き夕陽低く西丘に垂れる頃我等は胸に萬斛の憾憤を抱いて、再び自動車を驅つて大連の宿舎に歸つた。

七月二十日、午前五時起床、朝食後市の郊外栗屋農場を見學する。此處は關東洲に於ける代表的な模範農場なる山、廣さ九萬坪、主として林檎、櫻桃、葡萄等の果樹類が栽培されてゐる。園主に案内されて場内を一巡した後滿鐵農務課の千葉技師から滿洲の農園經營に就いての講話を聴く。

午後自由行動。有志を誘ふて金州の關東廳農事試驗場を見學する。此の試驗場は滿鐵の公主嶺及熊岳城試驗場と共に滿洲棉花の研究で名がある。余等は特に種藝部を訪ねて中富技師中島技師に詳細な説明を聴かすを得。即ち米國陸地棉キングスインブループト種を原種として純系分離の方法により此の地方の氣候に最も適合した早熟豊産な優良種の選抜に努めてゐるのであつて、今年はそのF<sub>1</sub>に當り、既に品質に於ても又操棉歩合に於ても印度棉に優ると言ふ事である。將來は廣く南滿に普及させて日本の棉花自給に盡すのだと兩氏の意氣は頼むし。

夜は夫々市中見物。午後十時五十分十八輛連結の特別列車で一路奉天に向ふて出立。

奉天

七月二十一日、列車は坦々たる一望の南滿平野をひた走りだ。所々鐵

道守備の頼むしい日本の兵隊さんに見る我々が感謝の萬歳を浴せかける。沿道は總て日露の戦跡である。午前七時頃首山堡、續いて遼陽、それから沙河等を車窓より眺めて、やがて午前九時列車は奉天驛に立ち込む。ホームは手に手に日章旗を打振る歡迎の群集でごつた返した。期せずして萬歳の爆發だ。二年前まで舊軍閥政權の本據奉天は今や平和の使徒の訪問を受けたのである。約三十分停車の後列車は郊外の舊東北大學へ向ふ。此時分から雨降り初む。午前十時東北大學に着く。

饗食後大學講堂に於て壯麗な結團式が行はれる。副團長の式辭朗讀、學生代表の宣誓、日滿官民の祝詞、特に滿洲國青年學生の祝詞には我々は拍手を送つて之を受けた。

夕食後は夫々故郷への便りに忙しい。雨も霰れて窓から月が射し込む滿洲の夜は冷たい、十時の點呼がすむと早速アンペラの上で毛布にくるまる。

七月二十二日、終日雨。今日から一週間此處東北大學の講堂で滿洲の各大家から滿洲に就いての講義を受けるのである。今日の講義は午前 青年學徒を迎へて所懐を述べ同 滿洲國の政治

午後 熱河及河北作戦の實戰談 どれも皆現地に於ける生きた新しい内容を持つた堂々の講演である。此の大學はもと張學良の設立によるもので、排日の總本山だつたと云ふ、當時の排日の源泉が今若き學徒一千の滿洲産業建設の本據にならうとは何と云ふ皮肉の事であらう。

七月二十三日、今日の講義、滿洲經濟建設方針。緊張した講演。皆感

年賀廣告募集

(再録)

千曲時報編輯部

例年の如く千曲時報新年號に年賀廣告を登載し發行日を正月一日に臨時變更する事と致しました。就きましては左記御承知の上何卒御申込み下さい。

- 一、本紙に年賀廣告を出された各位は別に本會々員宛賀状は省略せられ度し。
- 二、御申込は十二月廿日までに到着する様千曲時報編輯部宛端書にてお願い申し上げます。
- 三、千曲時報は會員全部即ち現職員賛助員より舊職員賛助員まで残らず配布して居ります目下の發行部数は千五百五十部であります。
- 四、廣告料として金五十錢申受けます。便宜上同窓會振替口座東京四三三四一へ年賀状なる旨御明記の上御拂込下さい。様御願ひいたします。

激の裡に聴き入る。

午後七時半から大學の大グラウンドで團懇親會を兼ねて北滿出征の勇士を慰問する會を開いた。マイクを通じて學生代表純真な氣持をそのまゝ率直に送別の辭を述べれば之に答へて勇士達、手も破れんばかりの拍手

竹内君を憶ふ

第六期養蠶科卒業生竹内清君は滿五ヶ年の闘病生活及令閨夏代さんの寢食を忘れての看護も其効なく三十歳を一期として最愛の夫人及三子(長男直道君十一歳、長女九歳、二男六歳)を残して十月二日午後五時最後の任地長野縣伊北農商學校の所在地なる上伊那郡伊那富村字宮木の寓居にて遂に逝つた、實に御氣の毒の至りである。君は在學當時より卒業後任を愛知縣西尾蠶絲學校及長野縣伊北農商學校に在し迄終始一貫眞面目の三字を以て盡さるゝ人格の人に教育者として最適任であつた。兩校在職中は専門の學科以外に動植物學を擔任して之が文檢を目指し致々として勉強し之が標本を見ても其の努力の跡を知る事が出来る。他方常に日蓮上人を信じ臥床數年、殊に最後の一年餘は全く身體の自由を失ひ結核性の脊髓カリエスと云ふ悲觀的な病氣にも拘はらず心境は平坦海の如きものがあつた、自分は石川君と共に數度君を病床に見舞つた時も訪ぬる友少き事として其の都度殊の外喜ばれ種々なる談話を交したるも身體の衰弱漸次甚だしきにもかゝはらず心地は愈々平和なる様子を見受けて一驚せしが之れ全く宗教心の然らしむる所にして枕頭には藥餌と共に日蓮宗に關する圖書を常に見受けられた。

一方經濟的方面に於ては元より蓄財とはなく農商學校に於ても北原校長外職員の御盡力に依り法規の許す最大限度の便宜を得たるも何分長年月の病床生活、治療にも意の如からず先年二、三友人の發起により見舞金を募集呈上せし事もあつて、友情の厚きに泣いて感銘せられた、九月中旬石川君の見舞の結果心身の衰弱甚しく心臓さえ弱つた様見受たとの報に自分も一日も早く君を見舞はんとして遂に其の機を失し春以來逢はずして永別となつた。後に令閨よ

弔慰金募集廣告

本會々員

- 竹内 清氏(蠶 六)
- 一之瀬貞嗣氏(蠶 十)
- 大池 彰氏(蠶 九)
- 八田直次郎氏(絲 十三)

豫而御病氣の處養生不相叶竹内氏は十月二日一之瀬氏は同十五日大池氏は十一月廿日八田氏は十二月三日遂に御逝去被致候間此段本紙上を以て及御通知候也

追而有志弔慰金は竹内氏及一之瀬氏の分は十二月末日迄に又大池氏及八田氏の分は一月末日迄に取纏め遺族へ贈呈可致候間便宜上振替口座東京四三三四一へ夫々御明記の上御拂込被下度候

昭和八年十二月十五日

上田蠶絲専門學校千曲會

りの話に逝去の數日前より石川君と自分とに何か依頼したき事ありしと聞くに至つては返すがへすも残念の極みであつた。罹病當時父母の膝下に歸りて療養をすゝむる者ありしも絶對安靜を要しこれすら出來得ず遂にあの不便なる田舎の寓居にて逝つて終つた。

幸、君には罹病の前年契約せし生命保険ありしも之とて母子四人の生活の數年の資に足るのみ、今後幼子の成長を唯一の樂みとして舅姑の恩給生活しつゝある大垣市に同居永住せらるゝ未亡人夏子さんの心情に同情すると共に幼兒三人の恙なき成長を望み同窓各位の絶大なる御同情を希ふものである。(鹽原生)

### 亡友大池彰君の面影

金崎 眞英

十一月二十日午後四時長友大池彰君逝去せらる。誠に哀悼に堪へざる次第である。

九月以來肋膜炎にて療養中其効顯はれ漸次快方に向はれつゝありし折柄、併發の化膿性肝臓炎のため遂に斃られたのである。

君齡三十有三年、最後迄回復の意氣に燃えながら可憐猶春秋に富む未來と、うら若き御令閨、殊に頑是なき愛兒二人(三才の女兒と二才の男兒)を残して、げに朝露の如く散られたる其心情を察し且つは一人息子であり一家の中心たる君を失はれたる御家族の御悲歎の状を見る時誰か涙なきを得ようや。

大正十一年春學窓を巢立した君は直ちに須坂町に在る上高井蠶業學校(當時農學校)の教諭として招聘せられ、翌年長野縣蠶業試驗場の創設せらるゝや入りて、未だ設備不完全、手不足の折柄にも不拘指定蠶品種の改廢、新品種の育成改良に全力を傾注せらるゝ事三年余、之がため擧げ得た試験場の業績、受け得た業者の

利益は實に莫大なものであつた。斯くして大正十五年夏惜まるゝ身を蠶繭課に轉ぜられ茲に早くも七星繭の歳月が流れた。其間指導獎勵方面特に繁雜なる養蠶業組合及養蠶教師に關する事務を擔任せられ、其の成績見るべきもの多く其の効績數ふべきもの多くあつた。

時將に蠶界多事、此時に當り君の如き縣内の事情に精通せる英才を失ひたるは、本縣蠶絲業界のため誠に惜みても余りある所である。

君瘦軀長身幼少より蒲柳の質、爲に日常健康に注意せられ衛生を重んぜらる事甚だしく、常にコンパクト型のアルコールと脱脂綿容器を持参し又宿屋では他人の一度手を通した寢衣の下水(浴衣)は絶対に着用しなかつた。或時浴衣の一度着用せる否かの鑑別法を聞いたのに對し「一度位の使用では襟垢の着かない場合が多い。此の時でも尻の部分には必ず皺があるので判る」と。ナル程うまい鑑別法があるものだと思ひした。萬事が此調子の潔癖家であつた。

猶君は煙草を喫まず酒を嗜まらず只寫眞を好むの他所謂道樂なき堅人であり運動としては時々テニスをやる位であつた。

斯くの如く身持堅固にして衛生的の君ではあつたが、責任感強く仕事に熱心なため病床に臥し身動きも出來ぬ直前迄出勤精勵されたのと、現在の醫學では施す術なきと迄云はれる肝臓炎のため遂に再起の機を失はれたのである。

學生時代の池君は寧ろ孤獨的人であつたが、此の性格は年と共に去り最近では如才なき所謂社交的とな

なり久瀧の友を驚かすに至つた。大池君の眞面目にして仕事に熱心なる事は余りにも有名であり、神經質にて几帳面な性質は服装上にも事務上にも實によく現はれ、何時如何なる場合でも君の服装には一點非の打ち所なく事務書類は勿論置物一ツでさへも整理整頓實に劃然たるものであつた。

頭髮の亂れ一本なき君に接する時机上に塵一ツなき君が事務所を訪れる時誰人も君が持つ此の性格を容易に知る事が出来た。

筆拙なく君が爲人の全貌を現はし得ないのは甚だ遺憾であるが、今は幽明相隔つ君が英靈に對し靜かに冥想し深く追弔する次第である。

### 第七回代議員會總會記事(一)

十一月二十三日午前十時より本校校堂に於て第七回代議員會を開催す

當日代議員並に役員として出席せるもの左の如し。

- 代議員 (東京) 田中福雄、八木誠政、吉田榮治、笹本保雄 (神奈川) 木内保平 (茨城) 船後勇平 (兵庫) 立岩笑保 (群馬) 橋本景吉、岡部彌平、都丸清治 (埼玉) 門平潤一郎 (東海) 戸倉八峰、大箸政平、小林茂樹 (三重) 篠山平三郎、朝長勝治、橋本武光 (近畿) 高田茂重郎 (山陽) 小川保(宮崎) 中島茂 (山形) 林十郎 (福島) 桑原與四右衛門 (新潟) 大谷内三衛 (北陸) 佐藤良太郎 (北信) 鶴田定平、飯島正胤、猪坂直一、勝又藤夫、中澤忠(鷗友)、島倉晉進(安

筑) 久保田正樹、石井謙三(龍川) 田口博輔。

### 本會役員

- (理事長) 松村季美 (理事) 浦生俊興、林貞三、倉澤美徳、齋藤菊雄、野口新太郎 (常任幹事) 川船卓爾 (評議員) 原田兵衛、岸勝彌、藤井料次、針塚名譽會長の挨拶あり、終つて議事に入る、理事長議長互選の件附議す、議長は理事長の指名によるべく動議成立せり、理事長は佐藤良太郎氏(北陸)を指名し佐藤氏と交代す佐藤氏議長に就任の挨拶を述べ提案の審議に入る。

一、役員選舉 議長指名の詮衡委員七名を擧げて詮衡の動議成立す、議長は左記七名を指名せり。

- 詮衡委員 岡部彌平、立岩笑保、原田兵衛、藤井料、勝又藤夫、木内保平、篠山平三郎

詮衡委員は別室に於て左記の通り本會役員を選衡せる旨報告す、全會一致委員の選衡通り可決せり。

理事會は更に理事長を互選し松村理事代表して浦生氏を理事長に選舉せし旨全會拍手裡に報告す。

常任監事は定員不足に付き他日互選の上報告する事に決す。

- (理事長) 浦生俊興 (理事) 松村季美、林貞三、倉澤美徳、齋藤菊雄、飯島正胤、野口新太郎 (監事) 川船卓爾、高木三治、塚田鏡磨 (評議員) 伊藤競、飯島貞雄、原田兵衛、二宮九三二、沖瀧治、岡村源一、岡部彌平、田口敏夫、高須兵司、永井榮、野澤泰治、久保田一徳、佐藤一岸勝彌、鹽原克巳。

### 千曲會日誌

十一月二日 母校製絲科第三學年生八日より十一日に至る四日間京濱地方見學のため上京に付東京神奈川兩千曲會長(指導方依頼せり)

十一月十七日 母校生理學實驗室に於て理事會開催第七回代議員會の準備其他に關し協議せり

十一月十八日 飯田町に於て龍川千曲會總會開催せらる本會より浦生理事出席せり

十一月十九日 松本市に於て安筑千曲會總會開催せらる本會より浦生理事出席せり

十一月二十一日 長野縣蠶絲課勤務の大池彰君逝去に付即時電を發せり

同日 養蠶科事務室に於て第七回代議員會開催事務の各係長會議を開き諸般の打合せをなせり

十一月二十二日 分擔したる各係は午後より代議員會開催の諸準備を行ふ

同日 午後七時より海野町上林ホテルに於て出席代議員各位と協議懇談せり

十一月二十三日 午前十時より第七回代議員會開催午後五時閉會

午後六時より瓢水亭に於て母校教職員と共に懇親晚餐會を開催せり

同日 大池彰氏の葬儀郷里壇科郡坂城町の自宅に於て執行せらる本會を代表して須田圭二氏會葬せり

十一月二十八日 故坂本孝子氏御遺族へ有志弔慰金四十四圓五十錢贈呈せり

### 支會區域の變更

支會區域を左記の通り變更し十一月二十三日より施行す

- 支會名 支會 區域
- 東京 千葉縣 山梨縣
- 群馬 群馬縣 栃木縣

忠言毒話

千葉 高島生

自分の原稿が活字になつた時、誤植の多いのは誠に氣の腐れるものである。殊にその文章に對して責任感が強ければ強い者ほど、之を氣に病むのは當然のことである。故内村鑑三先生は、福音の福が禍の字になつて居たのをみて、コウセイ怖るべしと嘆ぜられた。全く神の福音を傳へようとするのに、却つて神の福音と間違へられては、校正の不始末が、後世まで誤り傳へられることになるから、コウセイ怖るべき次第なので決して單なる洒落ではない。

借て十月號の拙文「顔忘れ症」に就てみると、ひどい誤植のあるは全くウソザリさせられた。讀む人は別段氣にもとめられなかつたであらうが、筆者にとつては一些事として見逃す譯には行かない即ち「人心を攪する」が吹攪するになつて居たり、「印刷沼」とあるべきを「印刷」となつて居たり……まだ「數ヶ所の誤植があつた。之ではまるで意味が通じないではないか。

一体之は誰の責任か? —と聞き直つてかゝれば、編輯者——校正係、印刷所等の責任もあるが、その一半は原稿にもある。何しろ自分の悪筆は相當有名なんだから。併しいくら悪筆の原稿でも文意の通じない儘活字にする云ふ法はないから、ヤハリ責任は校正不十分と云ふことに歸着するかも知れぬ。兎も角今後は大に注意してほしい。

誤植の多いと云ふことは、時にとつて便利の場合もある。自分の誤説を突込まれた時、あれは誤植なんだと逃げるこ

とが出来るから。此種の人とは所謂世渡りの上手な人かも知れぬが、甚無責任極まる次第で、苟も自己の所説に責任を持ち文筆を以て之を人に傳へ後世に残さうとするには、一字一句も忽にすべきではない。十九世紀の數學者トドハンターは、その一生に身長に達するほどの著書を出したが、その中に一字のミスプリントをも發見することが出来ないと云ふ。曾て朝日新聞社がその新聞紙上に於ける誤植を發見した讀者に對し懸賞したことがあつたが、誤植の有無は確にその新聞紙の品位を知るバロメーターである。

最近まで東西朝日新聞紙上に連載された久米正雄氏の小説「沈丁花」は、普通ならデンチャウゲと讀むべき所を、チンチャウゲと振假名してあつたが、之は作者が書き現したい作品の感じからいつて、デンと讀むよりチンと呼ぶ方が、あの花の感じが出る云ふので、作者の殊更の申出によつたものさうだ。果して此小説は近來の傑作として江湖にチンチャウされたが、すべて文筆に従ふ者は斯くの如き細い點まで心遣をすべきものである。それを無責任な校正で滅茶々にされたんでは浮ばれない。

誤植論序にイマ一言。母校の二十五シウ年のシウの字は周か週か? 時報誌上には今まで兩方使つてあつて統一して居ない。自分は漢學者でもなし又新樂先生からきいた譯でもないが兎も角周が正しいのださうだから、今後は此字に統一して頂きたい。

二十五周年で想ひ出したが、一体之は二十五年目のことか、又は滿二十五年と云ふ意味か? 母校の創立は明治四十四年であるから、昭和十年は二十五年目に當り、滿二十五年は昭和十一年に當る勘定だ。本年は關東大震災の十周年に當り、精神作興詔書發換の十周年に當ると

云ふので全國に記念の催しがあつたことは御承知の通りだ。此場合大正十二年から數へて本年は正に滿十年に相當するから何周年と云ふのは滿で數へるのが本當かも知れぬ。佛事で死後滿一年目の日を一周忌と云ふが、滿二年目の日は二周忌と言はずに三周忌と呼び、以下七周忌、十三周忌などと云ふのはすべて足かけで數へて居る。サア斯うなると何が何やら一向に分らなくなつて了ふ。

此二十周年の祝賀をやらうと云ふ時近畿支部から銀婚式の例をひいたかどうか、兎も角二十年を祝ふと云ふことは世上の慣習に乏しいから、二十五年を祝ふことにしたらどうかと云ふ意見が出たやうに記憶して居るが、誠に尤もな事と思ふ。それが理由は別ながら二十周年を延期して二十五周年を祝ふこととなつたのであるけれど、満か足かけか、その邊の認識に缺ける所がありはしないか。

私は思ふ——目出度いことは早いがい、丁度喜字の祝を七十六、米字の祝を八十七とする者があるやうに、母校創立二十五周年祝賀は斷然足かけ計算に基づいて昭和十年に舉行すべきである。殊更創立二十五周年と呼ぶ必要はないが、創立二十五周年と呼ぶことだけは注意しなければならぬ。

國蠶絲の蠶品種はすべて番號で呼ばれて居るが、百號未滿は一化性、百號以上は二化性であつて、その番號も壹貳參字を用ひないことは分つて居るが、一〇五號、一〇六號等と呼ぶには何と言つたらよいか? よく世人は一マル五號とか、イナル六號とか呼ぶが、〇は零でマルではない。だから一レイ五號とか、百六號とか呼ぶことにしたいものである。

又一代雜種のFをFウンと呼ぶ人があつた。御當人は化學の分子式流に讀んだつ

もりで得意かも知れぬが、きいて頗るキザであり、又耳障りでもある。この場合にはFはリンに非ずファーストの意味であるから、マアおとなしくFイチと呼んで置いたらよからう。

「例年の如く」年賀廣告の募集が始まつた。廣告料の収入が目的だと云ふから餘り理窟を言はないで好くが、それにしても「本紙に年賀廣告を出された各位は別に本會々員宛祝状は省略せられ度し」なんて餘分のオ拙介だ。誰が年賀廣告をみて廣告主が自分に對して敬意を拂つたものと思ふものか、却つて「彼奴五十錢で間に合せやがつたナ」と思ふ位が關の山である。だから主なる所へは賀状を出して、その上「御尊名何ひ現れ」のあるのを慮つて千曲誌上に廣告するのが本筋なんだ。之は毒語に非ず、忠告として謹んで承りおかれたい。

最後に年賀狀の宛先は必ず私宅宛とすることに付注意を喚起したい。役所や學校や會社へ山のやうに來る郵便物の中から自分宛の賀状を拾ひ出すのは容易なこととなく、又紛失もし易い。殊に來年の元日は當中喪の關係で拜賀式も行はれないから元日には登壇しない。従つて折角元日に配達された賀状も四日か八日になければ入手しない場合が多からう。だから私宅宛にしると云ふ譯。そこで私の所は千葉市寒川新街六四であります——だ

(八、一一、二八)

農林省雜記

岳人生

どうやら冬が間近に迫つた様だ。午後になつて隣りの印刷局の屋根に下半分を打切られて射込む陽の光も何となく赤味を帯びて來て眞夏の灼熱は思へない。秋——秋——と叫んで居る間に全くそれは影繪

の様に針一つ落ちた音もたてずに唯胸の認識を微に残して逝つて仕舞つた創造の神は意識して初めから秋をこの様なものに造つたのかも知れない。如何に繊細な神程も秋には早鐘の様に大きい。覺られまいとして秋は來、深まりやがて冬を呼んで逝く。

秋逝かんとする此の月を晩秋と人は呼ぶ。紙一重の向うに雪を持つ冬が待つて居る。さればこそくもりつる空のしるしに雪見月と有家は詠むだ。冬を左程までに寂しきものとしなない私とその前兆である晩秋を寂しく思ふ。自然の山と川とを背景にした木立が秋枯れの姿を露す出すのは寂しきはあるが又奮闘ともなる美しさを思はずには詠む詞藻の泉を持つて居る。私が今見て居る秋は現實から一步も身を浮せられない、アスファルトの上に一葉散れば直ちに掃き去られて仕舞ふ様な落葉のみを想起する秋である。

同窓諸兄は北海道から台灣まで、に一步海を距て、滿洲までの地域を擁して各自異様の晩秋を味つて居られる事と思ふ次の號にでも私は是非その印象感觸を知らせて貰ひ度いと願ふ。霜柱を踏むであゝあの木枯が秋だつたのかと思ふ。

去る十月二十日。製絲業法が施行されてから滿一年の歳月を拾ふ。確定的な數字は未だ得られないが施行當時の工場數約三千七百七十。釜數約三十六萬六千であつた。八月一日現在及九月一日現在の工場數及釜數も目下統計中であるが大體免許、廢業、滅失及認可(増釜、減釜及改設)の結果は數字的には減である。生絲の生産數量と云ふ立場からは未だわからぬ。が凡らくこの點は不變と云ふ結果ではあるまいか。何としても傾向的には没落の製絲業である。人絹は生絲を浸蝕せず木綿を浸蝕



し歴迫すなんて結果的數字で強がつて見
たつて今日の絲價を聞けば誰だつて寒く
なるだらふ。人造木綿でなくて人造絹絲
だこれが木綿の贅肉に喰ひついて生絲の
瘦せくびに垂れ下つたのは確かだ。悲
感。見切りは禁物だが強がりもいけぬ。

住所移動及訂正

- 中村亀四郎 選蠶七 青森縣上北郡野邊地町大字野邊地船橋九
金昌漢 同 體泉郡(朝鮮慶尙北道)
中島 茂司 蠶八 長野縣鹿沼郡(長野市)
小口 一枝 蠶九 山形縣南陽郡南原村大字山五、三六一
柏倉 豊吉 蠶九 秋田縣鹿角郡(雄勝郡湯澤町)
萩原 幸胤 蠶十 秋田縣鹿角郡(雄勝郡湯澤町)
北澤 周一 蠶十 岐阜縣養老郡(稲葉郡加村新加納)
宮川 繁治 蠶十三 同
井手 末馬 蠶十二 熊本農業學校(熊本市出水町)(住所熊本市出水町今三二)
柿田 實作 蠶十三 深美郡養蠶業組合(愛知縣田原町深美郡農會内)
宮澤 勇 蠶十三 農林省蠶絲局蠶業課(東京市麹町區大手町)
山崎 壽 蠶十四 長野縣蠶業試驗場飯田支場(下伊那郡那村)
朱 寛淳 蠶十七 成鏡南道成鏡郡南州東面湖上里
關 展雄 蠶十七 長野縣埴科郡南條村
中澤 喜雄 蠶十八 埴科農蠶學校(長野縣埴科郡)
村田 一由 蠶十八 日本紡績株式會社人絹部(福島市外移妻村)
池内 眞吾 蠶十九 本校養蠶科
武田 一好 蠶十九 埼玉縣大里郡市田村恩田
梶田 陸 蠶十九 岡山縣和氣郡熊山村弓削二一八
竹内 博男 蠶十九 長野縣小縣郡神川村國分一、二、四
加藤 省三 蠶十九 秋田縣河邊郡種村種澤一三〇
濱村 一彦 選蠶五 長野縣上田市坂下町
倉元 隆太 蠶二十 岡山歩兵第十聯隊留守隊第二中隊第九區隊第一班
遠山 正人 蠶二十 長野縣北佐久郡芦田村(住所北佐久郡横島村)
頼富 正廣 蠶二十 入 營
町田 史郎 蠶二十 宇都宮縣重兵第十四大隊第一中隊第一班
赤池 勝雄 蠶二十 同 第二中隊第二班
寺島 一萬太郎 蠶二十 長野縣上高井郡那住村大字都住六八
船越 重勝 選蠶五 船越重勝商店(横濱市中込山下町一九八)(住所横濱市神奈
川區鳥越三二)
黒田誠一郎 選蠶八 石川縣生絲檢査所(金澤市)
西 孝重 蠶八 島根縣鹿鹿務農(松江市)
是石 泰男 蠶十四 昭榮製絲株式會社沼津工場(沼津市)
櫻井 沈 蠶十六 片倉製絲紡績株式會社鳥栖工場(佐賀縣鳥栖町)
矢野 榮輝 蠶十七 Kankura and Co. 200 Madison Ave, New York City
神代製絲株式會社(長崎縣南高來郡神代村)
野田 美義 蠶十七 大分縣國東郡竹田津町三術寺方
井上 泰利 蠶十八 片倉製絲紡績株式會社熊本工場(熊本市)
林 龜一 蠶十九 片倉製絲紡績株式會社松江工場(松江市外津田村)
藤井 温彦 蠶十九 山口縣佐波郡中關町大字濱方二七三
丸山 勳 蠶三十 昭榮製絲株式會社二日市工場(福岡縣筑紫郡二日市町)

- 井田 英夫 蠶二十 日東紡績株式會社人絹部(福島市外移妻村)
萩原 行雄 蠶二十 滿洲派遣高崎歩兵第十五聯隊機關銃中隊
長谷川恒三 選蠶三 山形縣南村山郡上ノ山町十日町
阪本 政雄 紡七 日本輸出綿織物工業組合聯合會大阪檢査所(大阪市淀川區
本庄中通一丁目)
柳澤 信義 紡十 本校絹絲紡績科
訂正
渡部 互 蠶七 渡部。互。渡部。互。誤(訂)
渡部 齊 蠶十二 渡部。齊。渡部。齊。誤(訂)
竹内 清 蠶六 死亡
大池 彰 蠶九 同
一之瀬貞嗣 蠶十八 同
八田直次郎 蠶十三 同
昭和八年度千曲會通常
會費納入者
(但し印は外に蠶絲學雜誌代入り)
浦山藤吉(蠶五) 貞包 新(蠶六)
小林 勳(蠶六) 又木善義(蠶七)
伊藤喜代(蠶十) 阿部 和(蠶十三)
野里秀直(蠶十七) 關 順一(蠶十七)
細川 豊(蠶十九) 工藤實司(蠶十九)
古郡友一(蠶七) 加藤善一(蠶八)
萩野俊一(蠶八) 三好彌市(蠶八)
竹内健二(蠶十) 森西康充(蠶十二)
○白井要範(蠶十二) 望月榮作(蠶十三)
○則信忠夫(蠶十四) 笠原正己(蠶十五)
○堀井金次郎(蠶十六) 櫻井 沈(蠶十六)
兒玉逸夫(蠶十七) 松田 偉(蠶十七)
野口新太郎(紡二)
終身會費完納者
浦生俊興(蠶一) 柳坂小牧(蠶二)
立岩笑保(蠶三) 八木誠政(蠶三)
山岸松次(蠶三)
入會金納入者
宛納者
宮坂 收(蠶十八) 高瀬毅一(蠶十八)
茅野 功(蠶十九) 平尾孝平(蠶十九)
戸部正久(蠶十九) 工藤實司(蠶十九)
一金五圓也
枇杷木流雄(蠶十九) 山崎保太(蠶十九)
未納會費納入者
一金五圓也 山岸松次(蠶三)

編輯室から

千曲時報に誤植が多いと云ふ高島氏から
の御叱りを受けました。誠に編輯者とし
て申譯無い次第です。今後出来るだけの
注意は拂ひませう。
年賀廣告につき再三高島氏から御意見が
ありました。御高説は御尤とし廣告料を
出来るだけ引下げて見たのも幾分同氏の
御意志に添ひたい爲でした。而し恰度同
氏の御意見に反對意見もよく聞かされる
ので編輯者としては大体その中庸をとつ
て昨年と同様の廣告をして置きました。
千曲時報の年賀廣告並に暑中御見舞廣告
につきは幸ひ諸賢の忌憚なき御意見を
お伺ひ致します。

(1933.11.7)